

「大バアちゃんどうして起きんの？」

「ベッドのまま車に乗って、ベッドのままお花見なんて変や」ミミの二人の子供の声だ。

「しかし、これは好物ね」スマレが言った。

「でしよう、ベッドにコマが付いてるの。患者さんを手術室に連れて行ってるの見て思いついてね、花見に連れて行きたいからあんなの貸してもらえないかしらって看護婦さんに言ったら、これを貸してくれたの。目を丸くして、そこまでして連れて行く意義はないでしょう、って言われたけど」文恵が言った。

「気分転換は必要よね、明けても暮れても同じ空気が気分が腐るもの」車から降ろすのが大変

が言った。

「お花の匂いが一杯している所に行こう。お花だけは好きやったもの、バアちゃん。好い刺激になると思う」

「そうそう、お花見だけは好きで毎年ついて来た

もんね、アウトドア・ライフは嫌いやったけど」

「十年前の胃癌の手術からやで、確か」

「桜と牡丹とツツジと菖蒲」

「紫陽花と萩とコスモスと水仙」

「何をしても大ざっぱなバアちゃんやったけど、お花見だけは丁寧やったもんね。フッフッフ」

スマレとミミが楽しそうにお喋りしている。

「病人さんですか？」中年の女の声が出た。

だったのか、少し息を切らしたミミが言った。

「そうなのよ。気持ち良いことしてあげたら身体に元気が戻るんじゃないかと思って。バアちゃんの内臓とかの病気じゃないからね」文恵の声だ。

「八十歳でどうにかなるなんて考えられないもんね、うちのバアちゃんに限って」

「元気になって、百まで毒舌吐いてもらわな

いと」
「考えるのよね、バアちゃんの嫌味聞いていると、腹を立てながらだけど」ミミとスマレが喋っている。

「考えながら生きることはとても大切だよ。腹を立てながらも泣きながらでもいいから」信吾

「あッ、はい」信吾が驚いたように答えている。

「だったらこの先に、上の公園まで車で行ける道があるんですよ」

「ハア、ありがとうございます。でも今日は暖か

いから、森林浴しながら思いました」
「ああ、それはいいかもしれませんね。山道だから大変ですけど、丁度山ツツジが見頃だしね」と

女は言った。

何と、朝霧山に来ているのか、とカツは思った。

朝霧山なら公園は山の頂上にある。山といっても小さな山で、表の道を車で行けば十分とかからない。が、裏道は、木立のトンネルのようになっている所や沢に沿っている所があつて

気持ちが良いが、ちよつとばかり大変だ。

頂上の公園は、駐車場を少し上がった所にある。辺り一面桜さくらで、足元には緑の芝生が茂った広場になっている。見晴らしのいい一隅に、木のテーブルを取り囲むように四脚のベンチがある。北側の一角には由緒のあるお寺があり、桜の広場とお寺の間には、白と紫の大きな二つの藤棚がある。藤棚の下も芝生が茂っていて、幾つかベンチが置いてあった。

お寺の周りはツツジとサツキの花園になっていた。広い庭園や、伽藍を支えている頑丈な石垣をバックに咲く色とりどりのツツジの花は、華やかで、見ごたえがあった。桜の咲く四月の始めか

「ここからは、しっかりと押してくれよ」信吾が言った。ハイと口々に答えている。

「疲れたら僕も大バアちゃんのベッドに乗せてくれるん？」と、曾孫が可愛い声で聞いている。

「おいおい」と、カツは口がきけるなら声を掛けたかった。えらく親切にしてくれているようだけど、どう考えてもそりや無駄つてもんだよ。山ツツジが見頃なら木々の若葉も萌えていて山は一番美しいときなんだろうが、わたしやご覧の通り目が開かないんだから何の関係もないよ。車椅子で花見に来ている人は去年も二、三人居たが、大仰に家族総勢でベッドを押しながら花見に来ている人なんて居ないだろうが。好奇の目に晒さ

ら、ツツジが終わる五月の末頃まで、この山にはつねに花を楽しむ人の姿があった。

表の道は、山の中腹から両側が桜並木になっている。落花盛んな頃に来ると、何メートルも桜吹雪の中を通ることになるので、車の中からははいえ、ちよつと怪しい世界へ迷い込んだよ。うな気になって、妙に心が騒いだものだ。そんな気分も勿論悪くはないが、一度木漏れ日の差すこの裏道を歩いてからは、カツは殊の外この道が好きだ。寄る年波で、本人は意識してないようだが、心が自然を求めていたのかもかもしれない。去年は足を痛めていたので、車椅子で連れて来てもらったのだった。

れる私の身にもなってみる。酔狂も大概にしといてもらいたいもんだね。などと考えていると、頭上で鶯の鳴き声が聞こえた。思わずカツの意識は鶯の声を追った。

高い梢で、青葉若葉が日の光を受けてキラキラと輝いている光景が、まるで目で見ているようにはつきりと、カツの脳裏に浮かんた。すると、芽吹く木々の匂いに包まれている自分を感じた。途中から浴うている沢のせせらぎの音も聞こえてくる。野辺に咲き乱れているだろう草花もまるで目にしているように浮かんできて、カツはしばらく夢中になって、自然の息吹を楽しんだ。木立を吹き抜けてきた風のなんと爽やかなこと

か。何も感じないはずの手や足も、風を感じている、はつきりと。細胞の一つ一つに生気が注ぎ込まれているような心地好さを、カツは感じていた。時々カン高い曾孫の声も聞こえて、カツは夢心地でまどろんでいて、ふと気付いた。これを味あわせてたくて、皆は大変なのに、ベッドを押しまで私をここに連れて来てくれたのだと。混沌としていたカツの思念が、突如整った。

自分は、限りなく死に近い世界に一人立っている。それを意識したとき、闇の扉は開かれていた。あの泣きたくなるような孤独と絶望の闇は、差し追った未知なる死を恐れ、慄く自分が作りだしていた幻想だったのだ。そして、あの闇であらう私

ら、私の生き方の間違いは、ただ私が不幸になるだけでは終わらない。娘達を、あんな情のない言葉を言う人間にしたのは、物にこだわり体面ばかりを重んじて生きた、この私なのだろう。そして、夫を家に居られなくしたのも、信吾の心を荒ませていたのも。私の愚かさが、幸せにしてやりたいと真実願った愛する家族を不幸にしていたなんて、思ってもみなかった。

感謝と懺悔の念で一杯になったカツは、心の中で両手を合わせずにはいられなかった。

「バアちゃん、バアちゃんの好きなキリシマツツジが満開やで。アツ、バアちゃんの目から涙が出

を救ってくれたのは、いつも誰かの心配だった。自分を見守ってくれる人がいる、そう思えることで、闇は消えたのだ。

何よりも心を大事にする文恵は知っていたのだ、何もすることができなくても、心を添わせることで、孤独な心や疲れた心、弱った魂を救うことができることを。

それを私は、漠然と救われていることを感じていながらもなお、「本を読んでいるのか編物をしているのか知らんが、ええ気なもんやでこの嫁は！」と、暇を見てはベッドの横で座ってくれている文恵を、心の中で罵っていたのだ。

家族は、寄り添い支え合い、心を絡ませているか

とる「スマレが大きな声を出した。

気付かせてくれたのは嬉しいが、生き方を変えるにはあまりにも遅すぎると悲しむカツの心には、微笑んでいるようなツツジの花が見えてきた。と、カツの中のいつもの虫がモコモコと顔を出した。そして、まだ生きているんだから遅すぎるなどということがあるもんか、気付いた時こそがちやうどいい時だ、とつぶやいた。

「バアちゃん意識があるんや、元気になんじよんや」スマレの弾んだ声が、花を撫で伽藍を越えて、五月の青空に舞い上がっていた。

(以上10月21日放送分)

完